airiti

村上春樹《不帶色彩的多崎作與他巡禮之年》中之世代符碼機能

落合由治
淡江大學日文系教授

摘要

村上春樹是一位 1949 年出生的日本當代最為著名的代表作家。他的作家經歷如實地反映在他的作品上。村上春樹的記憶，傳達出以下第二次世界大戰後日本擁有獨自的共同時代記憶與符碼。

1. 1931 年至 1945 年：大日本帝國戰爭，村上春樹的家族記憶。
2. 1945 年至 1950 年代：團塊世代出生。團塊世代是大日本帝國於第二次世界大戰戰敗之後，軍人返回祖國日本之後所生的孩子。日本由戰敗走向復興時期。
3. 1960 年代：日本高度經濟成長的時代。戰爭時期出生的世代跟團塊世代聯合反對美日安全保障條約的學生運動時代。
4. 1970 年代：團塊孩子輩出生的世代。石油危機、美金衝擊造成日本技術革新與安定成長時期。
5. 1980 年代：泡沫經濟時代。戰爭時期出生的世代跟團塊世代聯合造就經濟奇蹟與「Japan as NO.1」的日本產品的高超技術能力席捲世界各國的時期。
6. 1990 年代至今：泡沫經濟幻滅時代：持續 20 多年的經濟不景氣以及經濟衰退、社會問題嚴重的時代。就業困難以及就讀名校所產生新的 M 型社會問題時期。

上述的時代背景，被當作日本社會文化符碼，隱藏於村上春樹的《不帶色彩的多崎作與他巡禮之年》之中。

關鍵字：村上春樹　1949 年　日本　世代　符碼

airiti

A function of generation sign in Haruki Murakami ' Colorless Tsukuru Tazaki and His Years of Pilgrimage '

Ochiai Yuji

Professor, Tamkang University, Taiwan

Abstract

Haruki Murakami is a writer who represents Japan that came into existence in 1949. His writer career is reflected in his work very clearly. Haruki Murakami's memory projects an original generation memory and the sign of Japan after following World War II.

①1931-1945 years: War age of Japan empire, this is the memory of Haruki Murakami's family.

②1945-1950's: Appearing of baby boom generation. Baby boom generations are children who were born from the demobilized serviceman is ruined after World War II. Revival age from war damage of Japan.

③1960's: Era of high-speed economic growth of Japan. Generation when being fighting and age of U.S.-Japan Security Treaty opposite student movement by baby boom generation.

④ 1970's: Generation where junior baby boomers were born. Technical improvement and stable-growth period of Japan by oil crisis and dollar shock.

⑤1980's: Asset-inflated economy age. The baby boom generation achieved an economical success with the generation while fighting. Age when technology of made-in-Japan product of "Japan as NO.1" dominated the world.

⑥1990-now: The collapse of the economic bubble age: Age of a recession and an economic and social decline that continues for 20 years or more. Age of social polarization to which new class discrimination by job scarcity and famous university faction’s progress.

These are all the codes of the Haruki Murakami work as a social cultural sign of Japan.

Keywords: Haruki Murakami, 1949, Japan, generation, sign

airiti

村上春樹『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』における世代記号の機能

落合由治
淡江大学日本語文学科　教授

要旨

村上春樹は1949年に生まれた日本を代表する作家であるが、彼の作家的経歴は、その作品に非常に色濃く反映している。村上春樹の記憶は、以下のような第二次世界大戦後の日本が持つ独自の世代的記憶と記号を映し出している。

①1931～1945年:大日本帝国の戦争時代:村上春樹の家族の記憶。

②1945～1950年代：団塊の世代の生まれ。団塊の世代は大日本帝国が第二次世界大戦で滅亡した後、復員した軍人から生まれた子供たち。日本の戦災からの復興時代。

③1960年代：日本の高度経済成長時代。戦中世代と団塊の世代による日米安全保障条約反対学生運動の時代。

④1970年代：団塊ジュニアが生まれた世代。オイルショック、ドルショックによる日本の技術革新と安定成長期。

⑤1980年代：バブル経済時代。戦中世代と団塊の世代が経済的成功と「Japan as NO.1」の日本製品の技術力で世界を席巻した時代。

⑥1990～現在：バブル経済崩壊時代：20年以上も続く不況と、経済的社会的衰退の時代。就職難と有名進学校による新しい身分差別化が進行している社会的二極化の時代。

これらはすべて、日本の社会文化記号として村上春樹作品の暗号となっている。

キーワード：村上春樹　1949年　日本　世代　記号

airiti

村上春樹『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』における世代記号の機能

落合由治
淡江大学日本語文学科　教授

１．作家の経歴と作品との関係

村上春樹が生まれたのは 1949 年で、この時代は、旧大日本帝国が 1945 年の第二次世界大戦による敗戦で国家としての主権と独立を失って滅亡し、アメリカ軍を中心とする連合軍に占領されていた時期である。この時期は、日本は独立国家ではなかった。1951 年、日本は連合国の各国と「サンフランシスコ講和条約」を結び、その後に、正式の独立国家として「日本国」が誕生した。1945 年から 1950 年のこの期間は、第二次世界大戦による旧大日本帝国の滅亡後、復員してきた軍人たちから生まれた子供が非常に多かった時代で、後に人口学的な特徴から「団塊の世代」と呼ばれるようになった。[1]世界各地にも同じ現象があり、世界的にこうした第二次世界大戦後のベビーブームは、「ベビーブーマー」の世代と呼ばれている。同時に、この時代は「戦後混乱期」と呼ばれ、戦争による都市や社会的ダメージと、秩序の崩壊、犯罪の多発、軍人や移民の海外からの引き上げ、産業基盤の崩壊、食糧事情の悪化など、極めて多くの問題が起こっている。[2]村上春樹は、生まれた時代において特別な戦争と世代に関わる記憶を持っている、そうした特徴的な作家と言うことができる。

---

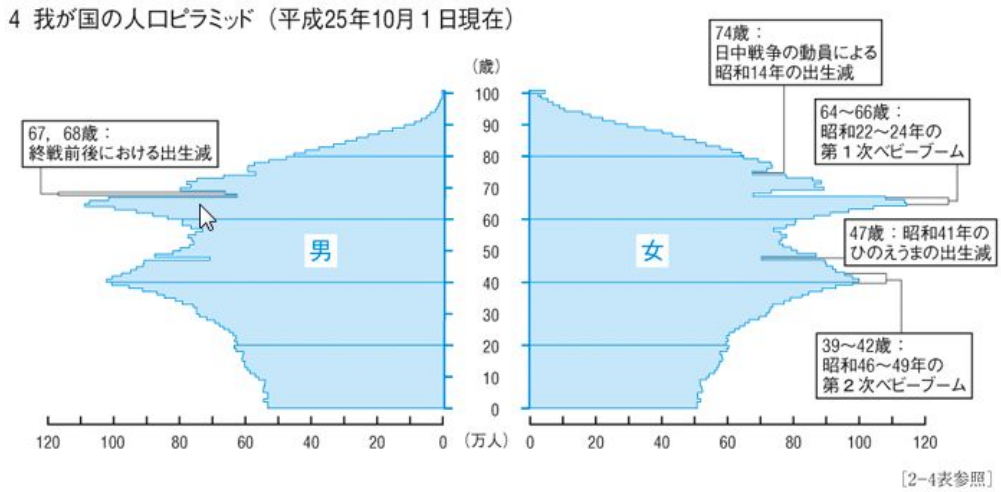
[1] 「団塊の世代」という命名は、堺屋太一（1976）『団塊の世代』文芸春秋によるもので、経済的社会的影響を予測していた。日本では、近年、「昭和ブーム」と「団塊の世代」の引退の相関が指摘されている。片桐新自（2007）「「昭和ブーム」を解剖する」『関西大学社会学部紀要』38-3P43-60 参照。

[2] 戦時期から敗戦後の混乱期から復興期の歴史については、メディアで様々に紹介されてきたが、見解や評価は論者によって一致していない。現在でも議論が続いている。

airiti

日本社会は政治的社会的経済的に第二次世界大戦の大きな影響を受けただけではなく、人口構成上も非常に大きな影響を受けた。その影響は現在も継続しており、「団塊の世代」は戦後の日本社会の「社会的神話」として社会の動きを支配してきた。また、その子どもたち「団塊ジュニア」も日本社会の動向に大きな影響を与えた。村上春樹の作品には、こうした日本社会の人口学的な構造が様々な点に反映されている。今回、取り上げる『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』にも顕著な人口学的記号性が作品世界の意味階層を形成している。

図１　日本の人口ピラミッド



（出典）総務省統計局人口推計（平成 25 年 10 月 1 日）
http://www.stat.go.jp/data/nihon/g0402.htm

2. 『色彩のない多崎つくると、彼の巡礼の年』の世代

この敗戦と団塊の世代は、『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』の中にも、多崎つくるの家族の話として、以下のように出てきている。

> 父親の名はたざき・としおだった。（中略）無一文から頭角を現し、不動産業に身を投じ、日本の経済発展に乗ってめざま

airiti

しい成功を収め、肺癌に苦しみながら六十四才で死んだ。(60P)

作品の現在を仮に 2010 年頃とすると[3]、36 才の多崎つくるは、1974 年前後の生まれになる。父親は 64 才で亡くなっているので、2010 年頃に亡くなったと単純に考えれば、父親は 1946 年頃の生まれで、ほぼ団塊の世代頃として想定されていると見てもいいであろう。それより少し前ならば、日本の戦争時代に生まれた戦中派かもしれない。つまり、ここには日本の第二次世界大戦体験が背後に隠されている。日本のこの前後の年代は社会的大変動と結びついており、この作品の場合も、そうした機能を果たしている。多崎つくるは、そうした戦争時代あるいはその直後に生まれた戦中派や団塊の世代が生んだ子どもたち＝団塊ジュニアの世代と日本では呼ばれている世代の人物として設定されていると言えよう。

村上春樹の作品に出てくる主な登場人物は、どれもこうした具体的な世代を持っている人物が多く、村上春樹が何らかの意図を以って、こうした設定をしていると言えそうである。[4]ひとつ言えるのは、こうした世代は日本の戦争の記憶と経済発展に密接に関係しているということである。

物語の舞台になっている名古屋には、海軍の戦闘機を製造していた三菱重工の工場や多くの機械関係の工場が集中しており、第二次世界大戦末期の 1945 年、度重なる名古屋大空襲により市街地や工業地区のほとんどは廃虚に化していた。[5]多崎つくるの父親が生まれ幼

---

[3] 『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』の中には、2011 年の 3.11 大震災を思わせる挿話や話題は出ていない。そこから考えれば、作品の現在は 2010 年頃と考えられる。

[4] たとえば、村上春樹の最初の小説『風の歌を聴け』には「この話は 1978 年の 8 月 8 日に始まり、18 日後、つまり同じ年の 8 月 26 日に終わる」という一節があるが、物語の時間は登場者の 29 才の僕の年齢からかんがえると、1970 年の夏に設定されている。万国博覧会、安保闘争など日本では多くの出来事があった年で、世代記号を明確に組み込んで描かれている。

[5] 戦争に関する資料館調査会（愛知県・名古屋市）「愛知県における空襲の概況（名古屋市）」
http://www.pref.aichi.jp/kenmin-soumu/chosakai/kuusyu/nagoya/nagoya1.h

airiti

少年時代を過ごしたのは、戦時下で廃虚になった名古屋市であったと考えられる。

図２　空襲を受ける三菱重工の工場（左）と大空襲で廃墟と化した名古屋の中心地（右）

1945～50 年代の名古屋市街

http://www.met.nagoya-u.ac.jp/SCHOOL/history2.html　　http://fujita-kazuhide.jp/blog/entry-563.html

登場人物の世代から見ると、この作品では日本帝国が滅亡し占領状態に置かれ 1951 年に独立してから後の「日本国」が作品世界の基盤をなしていることが分かる。それは、この作品が逆に「日本国」でなかった時代＝日本帝国の時代を後景にすることから始まっていることを意味している。それは「戦前」「戦後」という 1945 年の敗戦の前と後をただ機械的に分けて連続的に捉える習慣的に日本社会で用いられている呼び方では捉えきれない、大きな日本社会の歴史的断絶をこの作品が意識しているためと考えられる。村上春樹は初期の『風の歌を聴け』から『ねじまき鳥クロニクル』など転換期と言われる作品でも 1930 年～40 年代の日本帝国の戦争やそこから派生した影響をなんらかの形で作品の背景に装置していることが多かった。しかし、この作品の人物設定では、かなり意図的に「戦後」、つまり日本帝国滅亡により連合軍の占領状態に置かれ 1951 年に独

tml（2014 年 7 月 13 日閲覧）

airiti

立してから後の「日本国」を作品の基盤に置いていると考えられる。

2.1 作品の時代 1950～1980 年代－多崎つくるの家族

多崎つくるの家族を考えてみると、日本の経済発展は 1960 年代の高度経済成長がピークである、そのとき父親は、ちょうど高校生ぐらいであり、その時代に不動産業で働き始めて成功し、生活が安定し始めた 1970 年代に子どもを生み、1980 年代の日本が世界中で経済的成功を収めた時代にビジネスを大きく発展させ、1990 年代のバブル崩壊後の時代も不動産ビジネスで生き延びた人と考えられる。作品に直接、書かれているわけではないが、世代記号から見ると多崎つくるの家族は、日本の戦後の経済的成功とともに経済的成功を収めた、有産階級である。

図３　バラックが並ぶ名古屋の繁華街・栄と復興が進む名古屋駅前

1950 年代の日本の復興（名古屋）

http://network2010.org/article/162

http://network2010.org/article/156

作品中で設定されている多崎つくるの父は、1960 年代の日本経済の高度経済成長時代に青春期を過ごし、70 年代の日本の経済発展とともに経済的成功を収めて家族を形成し、80 年代の日本経済のバブルの頂点の中で大成功を収めて大きな不動産を売買できる有産階級

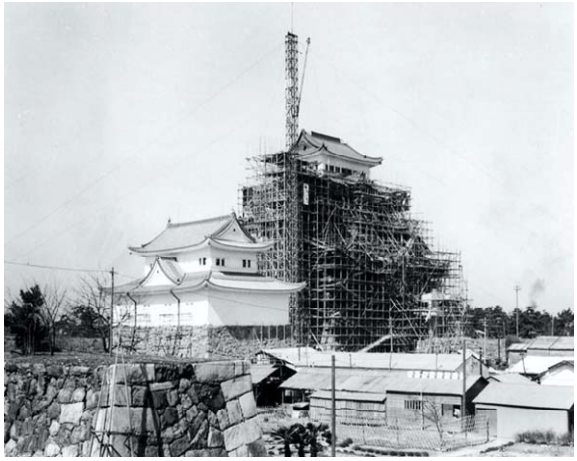
airiti

にのし上がった「日本国」の新しい資産家階級を象徴する人物と言える。

特に多崎の父が不動産業で成功できたと書かれていることには、戦争によってアメリカ軍の激しい爆撃を受け、市街地の徹底的な破壊に遭いながら、それを戦後に再建していった名古屋の復興過程を考えると高い合理性がある。作品の背景には、戦後、急速に日本の機械産業の中心として復興し、空襲によって廃虚になった市街地を新しい都市計画で計画的に再建していった名古屋の戦後の歩みが踏まえられている。同時に、名古屋の復興は日本経済の戦後の復興を象徴する出来事としてみることができる。

図４　空襲で焼失した名古屋城跡（左）と再建工事（右）

1960 年代の日本の復興（名古屋）



http://network2010.org/article/153

名古屋は 1970 年代以降、豊田自動車など日本の機械工業の中心地として大きく発展した。現在でもマスコミに取り上げられることはほとんどないが、実は日本の工業生産出荷額の 1/3 は東海地方が占

airiti

めている。[6]多崎の父の成功は、名古屋の経済的成功、そして 1980 年代までの戦後日本の経済的発展と軌を一にしている。村上春樹が名古屋を小説の舞台に選んだ理由も、その経歴が戦後の荒廃の中から復興していった戦後日本の発展と軌を一にしている点にあり、また戦後の「技術立国日本」を象徴する土地であるからと言えよう。

図５　生活水準が向上し､駅ビルが建設された 1970 年代の日本の市街地

1970 年代の日本（名古屋・豊橋）

http://blog.goo.ne.jp/curve519/m/201308

2.2 作品の時代 1980～90 年代－多崎つくるの世代

戦後の日本では、戦争の時代を中心に明確な世代記号があり、戦争前の世代は「昭和一桁世代」、1930 年代から 45 年までの戦時中に生まれた世代は「戦中世代」そして、敗戦後の日本の占領時代から 1950 年代に生まれた世代は広義の「団塊の世代」さらに、1960 年代以降は、戦後世代と呼ばれている。さらに、人口学的に特徴のある

[6] 林大（2006）「ものづくり大都市圏・名古屋圏の産業構造と都市構造」『日中都市化シンポジウム論文集』p69-90 参照。

airiti

「団塊の世代」が結婚して子供を生んだ第二次ベビーブームの 1970 年代は「団塊ジュニア世代」と呼ばれている。1974 年前後の生まれになる多崎つくるは、典型的な「団塊ジュニア世代」の人物である。多崎つくるは、日本がドルショックとオイルショックを受けた混乱を、技術開発で乗り越えて発展を始めた 1970 年代の生まれで、日本社会の経済的技術的成長と共に成長してきた世代である。1980 年代は日本経済が躍進した「バブル経済」時代であり、不動産と株の過熱した当機がバブルの原因を形成した。多崎つくるの父親はそうした動きと共に資産を蓄えていったと言える。また、多崎つくるは、そうした父親また家族の動きを見ながら 1980 年代に小学校、中学校、高校時代を過ごしていたと言える。

図 6　バブル時代の日本

1980 年代の日本：東京の発展と地方との経済格差の拡大

http://plaza.rakuten.co.jp/wakow/diary/200904190000/

http://www.zds.cc/blog/2012/03/post-1206.html

多崎つくるつくるが 1974 年生まれと仮定すると、作品の主要なモチーフになっているその高校時代のグループの話しは、1980 年代

airiti

のバブル経済末期から 1990 年代前半のバブル経済崩壊直後の時期の日本を踏まえている。

この物語の冒頭にある多崎つくるが 20 歳の頃に起きた、高校時代のグループの女性をレイプした疑いで、グループから追放された事件は、バブル崩壊時代の 1990 年代中期、1994 年頃になる。このストーリーは、多崎つくるの 20 才での出来事から始まっているが、その時代は 1990 年代の半ばで、時代で考えると、バブル経済崩壊後の日本が舞台になっていることがわかる。それは、バブル経済以後の日本社会の経済的文化的停滞期であり、学生にとっては非常な就職難の時代でもあった。この時代に正社員になれなかった人達が、現在、日本の大きな社会問題にもなっている。また、その後の 2000 年代には、「勝ち組」と「負け組」という形で、バブル経済崩壊後、有名大学を出て公務員や大企業の正社員になれた階層と、学歴社会での競争に乗ることができず、安定した職業に就くことができなかった階層との社会的階層分化が大きな問題になっていく。これがこのストーリーの、隠れた舞台である。

作品をただ読んでもこうした日本社会の動きは分からないが、こうした時代に人物の世代を設定していることには大きな意味があるであろう。「日本国」のメディアでは、団塊の世代と団塊ジュニアは、団塊の世代が社会の主導権を握っていた時代には「社会的神話」の二つの主体として、常に話題にされた世代である。それはプラスのイメージとして、新しい先進的価値観の体現者であり社会発展の原動力の世代だと言われてきた。[7]そうした「社会的神話」は、2000 年代半ばの団塊の世代の退職まで続いた。しかし、現在の研究では、団塊の世代だけに特別な価値観や行動力があるという、そうした見

[7] 団塊の世代と団塊ジュニアを特別扱した各種の研究やマーケティングが 1990 年代から 2000 年代半ばまで活発に行われていた。一例として、ハイライフ研究所（2005）「団塊世代と団塊ジュニア世代の価値観比較調査」http://www.hilife.or.jp/pdf/200505.pdf を参照。

airiti

方には客観的根拠がないことが知られてきている。[8]

作品理解の上でも「団塊の世代」を社会的神話と見ると、この物語の世界全体が一種の神話的空間に置換されることが分かる。団塊の世代の社会的神話が機能を喪失しつつある現在、団塊の世代の体験はむしろ批判の対象として捉えられるようになり、日本社会にとってのマイナス面や克服すべき課題が認識されつつある。[9]

この作品は前景構造では多崎つくるの青春期の挫折からの回復の物語、あるいは一種の教養小説的成長物語に読まれがちであるが、[10]以上、概略を述べてきた 1950 年代以降の「日本国」という土台から作品を読み直してみると、後景構造では戦後の日本社会の挫折と彷徨の物語と見ることもできよう。

2.3 作品の時代 90～2000 年代－多崎つくるの現在

この作品の登場人物は、物語の前景では多崎つくる本人とそれを取り巻く友人や恋人として登場するが、「日本国」の 90 年代以降の状況を重ねてみると、彼らには不思議な共通点が見られる。それは、まず多崎つくるを始め男性たちはまずみな学歴社会の勝利者であるという点である。作品中で多崎つくるは、先生の教えを受けたいと言うことでグループから一人離れて、東京の大学に進学している。大学名は出ていないが、私鉄の幹部社員に採用されるクラスの東京の有名大学に入学したのは日本の社会的現実から考えて間違いない。アオやアカも同様で、アオは豊田自動車の幹部候補に採用されるク

---

[8] 落合由治（2011）「「団塊の世代」の世代像とその記号性―1990 年代から 2000 年代への世代言説変遷から」『日本の伝統と現代』中央研究院 P509-558、周玉慧・青野篤子（2011）「変動の中の現代日本人の価値観と生活満足度」『日本の伝統と現代』中央研究院 P593-630 参照。

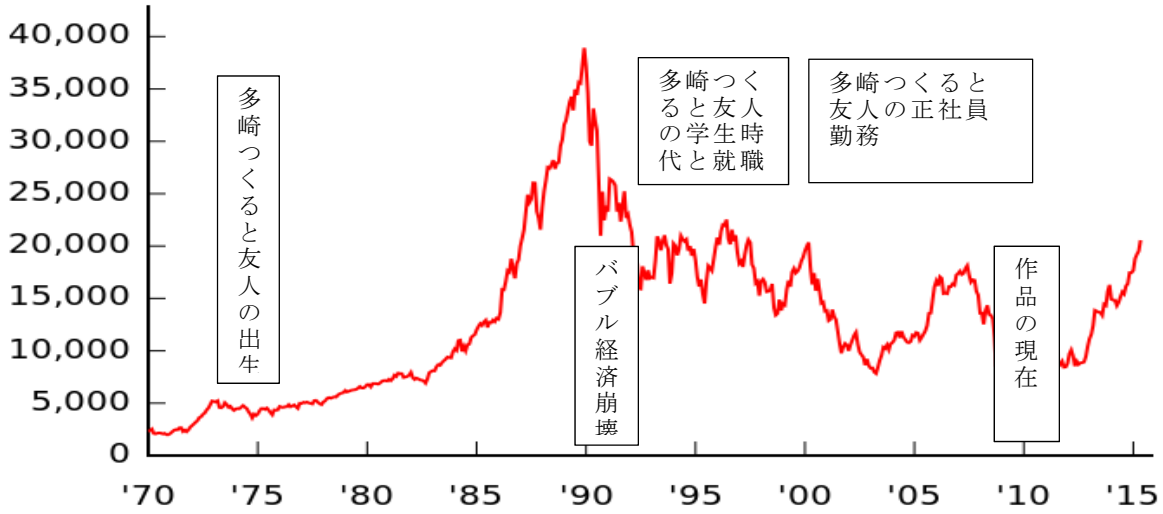
[9] 南壮一郎（2011）「成功体験のない若者と、成功体験に酔いしれる団塊世代　両者の共存の模索が日本社会の課題だ――“amadana(アマダナ)”のリアル・フリート会長　小寺圭氏【後編】」『ダイヤモンドオンライン』
http://diamond.jp/articles/-/10943（2014 年 7 月 13 日閲覧）

[10] 小山鉄郎(2013)「村上春樹を読む」成長する「巡礼の年」『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』について」『東奥日報』2013 年 5 月 24 日
http://www.toonippo.co.jp/news_kyo/entertainment/20130523010014341.asp
（2014 年 7 月 13 日閲覧）

airiti

ラスのやはり名古屋の有名大学に、アカもその人脈でコンサルタントができるクラスのやはり名古屋の有名大学に行っていたことになる。沙羅の場合も同様で、勤務先の大企業に採用されうる東京の有名大学出身者でなければならない。もう一つは、彼らはみな、正社員や個人事業家という、現在では一種の支配階級に位置している、社会的に各種保健や年金などの一種の社会的特権で保護された階層の人物ばかりという点である。これらは一種の日本社会の“暗黙の共通常識”から生まれる社会的記号性が指示する意味である。[11]

圖 7　1970 年から現在までの日本の平均株価指数 NIKKEI225 と物語の時間の関係



こうした設定は意図して行われたはずであり、この作品は実は、バブル経済以降の衰退する日本社会の中で学歴社会の勝利者として「勝ち組」の特権を認められて、それを享受できるステータスで生

[11] 現在、グローバル経済と情報通信革命の中で進行している世界的な就業状態の変動は、社会階層の極端な二分化を世界各国で起こしている。日本の状況については、森岡孝二（2011）「企業社会日本の成立と崩壊」『経済志林』79-1P 253-290、同（2011）「労働時間の二重構造と二極分化」『大原社会問題研究所雑誌』627P1-18 参照。

airiti

きているはずの団塊ジュニアの 30 代の日本人を描いているのである。しかし、作品からはそうした「勝ち組」であることの満足感や充実感はまったくと言っていいほど感じられない。読み取り得るのは、シロの悲　に連座した多崎つくるの挫折と深いトラウマの記憶であり、グローバル化社会での勝利者であるはずのアオやアカの虚無感や挫折感であり、日本を捨てて結局、フィンランドに移住したクロの深い悲　である。多崎の恋人である沙羅にしても、その身辺は不倫の相手かもしれない年長の男性に彩られており、不安定で未確定な状況におかれている。登場人物の姿は、社会的記号性からは理解できない個別性に拠って作品世界を構成している。こうした社会的記号性と登場人物の個別性の落差に目を向けることで、村上春樹が目指している小説世界も浮かび上がってくる。

世代記号から考えると、この作品のテーマは戦後日本社会のバブル期の挫折とそこからの先の見えない未来ということになる。戦後日本で日本人が当たり前だと思っていた、経済的競争での勝利や学歴社会の勝利者になることで社会的経済的成功を納めることの意義が次第に失われつつある状況を、作品の後景として構造化していると言えよう。

３．村上春樹作品のテクスト構造

『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』からは、村上春樹が目指している小説のひとつの方向性が明確に　える。端的に言えば、それは近代小説が目指していた一義的意味世界を超える多層的多義世界であろう。

表　近代小説と村上春樹の小説

	近代小説	村上春樹の小説
テクストの意味	表現は誰にとっても一義的であり、書き手は捉えた対象をすべて認識	すべての表現は見る視点によって変わり、多義的であり、書き手はその

airiti

	し意味を知り　くし描くことができる	中の可能性の一つをガイドのように読者に提示している
描かれる対象	対象は一義的であり、一の正解がある。書き手は確固としたその実在世界をすべて認識して、それを作品に完全に反映させる	すべての対象は多義的であり、また書き手や人間の認識には常に限界がつきまとうが、そのひとつの視点では明確な方向が示されている
基本的世界観	リアリズム 実在論 物論的合理主義	脱近代主義 現象論 意味論的合理主義

人間とは独立して客観が存在し、それを人間は写し取ることで、一の回　や一義的意味という形で認識し、支配することができるという前提で書かれていたのが近代小説のテクストであるとすると、人間と世界との関係は、世界内存在として常に客観は主観に対して地平的に現象する関係であり、見える部分があることで見えない部分も同時に生成する。テクストは描かれ得ないそうした余白や空虚を含んだ多層的な意味構造をそれぞれの読者にそれぞれの視点で体験させる模擬体験機だと見るのが村上春樹の小説観であろう。国境を越えた世界的な村上作品の受容と評価はまさに、その試行が実現しつつあることを証明している。

今回考察した、村上作品における世代記号もそうした、両義性を帯びたテクストで、本論で述べた解釈以外に世代を　らえる見方も同時に存在しえる。ただ、ある志向の元では、本論文で提示した理解は、明確に後景として浮かび上がる図であり、それはまた前景である多崎つくると友人たちの青年後期の物語と相　している。その意味では、村上春樹作品においては、記号性も地平的であり、主体の位置によって図となるものは変化する。村上春樹作品においては、1970 年代の記号論や構造主義の一義的客観主義的構造論をも乗り

airiti

越える表現が形成されつつあると言えよう。

テクスト

村上春樹（2013)『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』文藝春秋

参考文献

落合由治（2011)「「団塊の世代」の世代像とその記号性―1990 年代から 2000 年代への世代言説変遷から」『日本の伝統と現代』中央研究院 P509-558

片桐新自（2007)「「昭和ブーム」を解剖する」『関西大学社会学部紀要』38-3P43-60

小山鉄郎(2013)「村上春樹を読む」成長する「巡礼の年」『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』について」『東奥日報』2013 年 5 月 24 日
http://www.toonippo.co.jp/news_kyo/entertainment/20130523010014341.asp（2014 年 7 月 13 日閲覧）

堺屋太一（1976)『団塊の世代』文芸春秋

周玉慧・青野篤子（2011)「変動の中の現代日本人の価値観と生活満足度」『日本の伝統と現代』中央研究院 P593-630 参照。

戦争に関する資料館調査会（愛知県・名古屋市)「愛知県における空襲の概況（名古屋市)」
http://www.pref.aichi.jp/kenmin-soumu/chosakai/kuusyu/nagoya/
nagoya1.html（2014 年 7 月 13 日閲覧）

ハイライフ研究所（2005)「団塊世代と団塊ジュニア世代の価値観比較調査」http://www.hilife.or.jp/pdf/200505.pdf

林大（2006)「ものづくり大都市圏・名古屋圏の産業構造と都市構造」『日中都市化シンポジウム論文集』p69-90

南壮一郎（2011)「成功体験のない若者と、成功体験に酔いしれる団

airiti

塊世代　両者の共存の模索が日本社会の課題だ――
“amadana(アマダナ)”のリアル・フリート会長　小寺圭氏【後編】」『ダイヤモンドオンライン』
http://diamond.jp/articles/-/10943(2014 年 7 月 13 日閲覧)
森岡孝二（2011)「企業社会日本の成立と崩壊」『経済志林』79-1P 253-290、
森岡孝二（2011)「労働時間の二重構造と二極分化」『大原社会問題研究所雑誌』627P1-18

（注記）本論文は、科技部専題研究 103-2410-H-032 -047 -MY2 の成果の一部である。また、2014 年 10 月 18 日、大連外国語大学『東北亞外語研究』編集部「　言與村上春樹比較研究國際學術研討會」大連外国語大学 P18 で発表した内容を加筆　正したものである。

TAMKANG UNIVERSITY

□2015 年 4 月 30 日論文受理